

No.74 山口 啓介 「Tachikawa Box」

Keisuke Yamaguchi

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 5月15日付 立川市市報記事より

山口啓介の作品は、ペDESTリアンデッキの下、街の案内地図のようにセットされている。もともと、この場所は街区の総合案内のサインが置かれているはずだったが、そこを作家はもらいうけて面白い案内板をつくってしまったのだ。

よく見ると内部に二層の透明な板があり、手前のものには1994、奥には1989と書かれている。そう、これはファーレ立川の開発後（現在）と開発前の地図が二重映しに見えるようになっている。また、その奥と底部には植物がプレパレートされていて、これは立川で採れた植物なのだ。これらの三要素によって、作家は今の地図をここに置いたことになる。記憶の地形は、私たちの想像力をかきたてさせてくれる。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現:UR都市機構) 「ミニ通信」より

「TACHIKAWA BOX」は今年の5月、ヒルサイドギャラリーで発表された「Calder Hall Ship Project」の一部として制作されたものです。

このプロジェクトの概要は、そのカタログの序文に示されたのでここではくり返ませんが、当初この「TACHIKAWA BOX」は銅の船を硝酸で腐食させるための装置である「WATER TANK」と、20本の透明なチューブで結ばれていました。

そして3週間にわたって毎日微量の腐食で発生するガスと青色化した硝酸の水溶液が、このチューブを伝って「TACHIKAWA BOX」の基底部にある穴へ送り込まれ、その後この作品は水槽部と切り離されて穴にたまった水溶液は抜かれましたが、その時の腐食と酸化のプロセスの跡が基底部のゴムの上に印されています。

この作品は3つの層からできています。

1番上のプレートは現在の街のプラン、2層目が5年前の同じ場所の地図、3層目が先の基底部—地下層ですが、1層目はそのままこの街のサインシステムになります。

3層目の穴の位置は2層目の地図を基に比較的人々の往来による生活反応が感じられたポイントを選び、また2層目の黄色のラインによって再開発のために壊された建物を示しました。この“ファーレ立川”のアート計画の話があった時、決められた路上にその場所と関係なく置かれた「オブジェ」の類やビルの壁を埋めるだけの壁面になってはつまらないと思いました。

欲を言えば、街の全体的なデザインのコンセプトの段階からからみあうようなアートでなければ面白くありません。

この「アート計画」はかなりそういったアーティスト自身のわがままを許してもらえましたが、しかし、最初のテーブルに建築家と同じように参加を許されているわけではないので、今のところプランで示された「街」の方をアートが取り込む必要がありました。

今回、サインシステムを使ったのはそういう意味です。

そういったものを通して時間的なものの表現になっているとよいのですが。

また同時にこの作品がサインシステムとしてその目的通りに街を歩く人々に「使われる」ことになればいいな、と思います。

<ファーレ倶楽部 追記>

銅板画家である作家は、作業工程で使う銅板と腐食液によって発生した気体と水溶液の拡散を放射能の汚染に見たて、この作品の元々のインスタレーションを作りました。

そのきっかけは、ドイツに留学していた頃に、唯一の被爆国である日本人としての表現をしたいという思いに至ったことだそうです。